

代数体の p 分岐最大 p 拡大のガロア群について

東大・理 山岸 正和 (Masakazu YAMAGISHI)

いろいろな体の、分岐を制限した最大ガロア拡大 — 特
そのガロア群の構造 — は、数論の興味深い研究対象のひとつ
つである。例えば Šafarevič [Š1] には、局所体、代数体、
関数体の場合に、このようなガロア群の構造と関連する種々
の数論的問題が挙げられている。また $\text{pro-}p$ 群のほうが一般
の pro-finite 群よりは扱い易いため、分岐を制限した最大
 $\text{pro-}p$ 拡大を考察することもあるが、多くの場合それでもじ
ゅうぶん面白い。

ここでは、代数体の場合に、このタイプのガロア群につい
て得られた結果を報告します。

記号： p は素数、 k を体、 S を k の素点からなるある集合
としたとき、 k 上 S の外で不分岐な最大 $\text{pro-}p$ 拡大を k_S 、
その k 上のガロア群を G_S と書く。また k の最大 $\text{pro-}p$ 拡大、
すなわち S が全素点よりなるとき k_S を $k(p)$ と書く。

§1 Riemann 面

代数体と Riemann 面の理論の類似性はよく知られているが、これが以下の考察のひとつの動機でもあるので、まず Riemann 面の場合に知られていることをいくつか述べる。

k を複素数体上の 1 変数代数関数体, g をその種数, X を対応する Riemann 面とし、素点の集合 S を X の部分集合と見なす。 $\#(S) < \infty$ のとき、Riemann の存在定理によれば、 G_S は $X \setminus S$ の位相的基本群の pro- p 完備化と同型となる。このことから次がわかる。

(a) 生成元・関係式による表示、(pro- p 群として)

$$G_S = \langle u_1, \dots, u_m, s_1, t_1, \dots, s_g, t_g \mid u_1 \cdots u_m \cdot [s_1, t_1] \cdots [s_g, t_g] = 1 \rangle$$

但し $m = \#(S)$, また $[,]$ は交換子。特に $S \neq \emptyset$ ならば G_S は階数 $2g + m - 1$ の自由 pro- p 群であり、また $S = \emptyset$ ならば G_S はいわゆる種数 g の曲面群 (の pro- p 完備化) である。

(b) 自由積分解

$S = \{P_1, \dots, P_m\}$ とし、 P_i の惰性群を $G_i (\subset G_S)$ とする。 $g = 0$ のとき、 $G_S \cong G_1 * \cdots * G_{m-1}$ となる。ここで $*$ は pro- p 群としての自由積を表す。

成元・関係式による表示が知られている。例えば $p \geq 3$ ならば (このとき n は偶数)、

$$G_3 = \langle x_1, \dots, x_n \mid x_1^q [x_1, x_2][x_2, x_3] \cdots [x_{n-1}, x_n] = 1 \rangle$$

但し q は 1 に含まれる 1 の p 中乗根のうち最大の位数。

注：局所体の絶対ガロア群の表示も得られている (Jannsen-Wingberg, 1982)。

(b) 自由積分解は、素点が 1 個なのであまり意味がない。

(c) 中心の自明性

自由 pro- p 群については中心の自明性は既知であるが、Demuškin 群については次が成り立つ (既知かも知れません)。

定理 1 G は (pro- p) Demuškin 群とすると、次の 3 種の例外を除けば、 G の中心は自明である。

$$G = \mathbb{Z}/2\mathbb{Z}, \quad p = 2$$

$$G = \mathbb{Z}_p \times \mathbb{Z}_p, \quad p \text{ は任意}$$

$$G = \langle a, b \mid ab^{-1}ab = 1 \rangle, \quad p = 2。$$

このうち最後の G の中心は b^2 で生成され、 $\cong \mathbb{Z}_2$ である。

証明は省くが、§3 の結果の証明と同じ方針である。

系 k が上の意味の局所体 (すなわち $[k:\mathbb{Q}_\ell] < \infty$) とする。

$$(i) \ell \neq p, k \not\subset \mu_p \Rightarrow G_S \cong \mathbb{Z}_p,$$

(ii) それ以外の場合、 G_S の中心は自明。

§3 代数体

k を有限次代数体とし、 $p=2$ のときは総虚と仮定する。
 S は、 p 上の全素点の集合 S_p を含む k の素点の有限集合とする。この場合 G_S の構造に関してはまだわからないうことも多く、また数論の未解決問題で G_S の構造と関連するものも多い。例： k と p に関する Leopoldt 予想は、
 $H^2(G_S, \mathbb{Q}_p/\mathbb{Z}_p) = 0$ と同値である。

以下、§1 との類似性の観点から述べる。

(a) 生成元・関係式による表示 ([K6], §11 参照)

Šafarevič [Š2] は一般の S ($S \supset S_p$ とは仮定せず) に対し、 G_S の生成元の最少個数の計算および関係式の最少個数の上からの評価をした。特に $S = \emptyset$ の場合は、その後の類体塔問題の解決にも応用された。また $S \supset S_p$ の場合は、Šafarevič の結果と Poitou-Tate の global duality より、関係式の最少個数がきちんと計算出来る。

例 ([Š2], §4) $k = \mathbb{Q}(\mu_p)$, p が正則素数 (すなわち k の

類数が p と素) のとき、 $S = S_p$ に対し G_S は階数 $\frac{p+1}{2}$ の自由 pro- p 群。

しかし、適当な生成元を選んで関係式 a がたちまで決定されているのは、特別な場合に限りされている (Koch, Wingberg, Nguyen-Quang-Do 等の仕事がある)。

(b) 自由積分解

G_S が分解群の自由積に (大体) 分解されるための、 k , p , S に関する必要十分条件が、Wingberg [Wi] により求められている。簡単のため、 $p \geq 3$, $k \supset \mu_p$ とするとき、

定理 [Wi] k_S/k で分解しない k の素点 v_0 が存在するとき (あるいは v_0/p がわかる)、そのときに限り、

$$G_S \cong \ast_{v \in S \cup v_0} G_v \ast \mathcal{F},$$

ここで、 $G_v = \text{Gal}(k_v(p)/k_v)$, また \mathcal{F} は自由 pro- p 群で、 $r_k \mathcal{F} = 1 + [k_v : \mathbb{Q}_p] - \#S - (r_2 - 1)$ (r_2 は虚素点の個数)。

§5 でこの定理の応用を述べる。

(c) 中心の自明性

次の定理が主結果である。

定理 2 $S \supset S_p$, $\#S < \infty$ とする。

- (i) k が総実でない場合は、 G_S の中心は自明。
 (ii) k が総実とする。 k_S/k のすべての有限次中間体に対する p の Leopoldt 予想を仮定すれば、 G_S の中心は自明か、または G_S が p -ベル群となる。更に、

G_S が p -ベル群 $\iff G_S \cong \mathbb{Z}_p \iff k_S = k_\infty$
 (k_∞ は k の内分 \mathbb{Z}_p -拡大) が成り立つ。

例: p が正則のとき、 $k = \mathbb{Q}(\mu_p)^+$ (p -分体の最大実部分体)
 $S = S_p$ に対し、 $G_S \cong \mathbb{Z}_p$ 。

定理 2 の証明の概略。

- (i) k_∞ を k の内分 \mathbb{Z}_p -拡大, $H_S = \text{Gal}(k_S/k_\infty)$ とおく。
 まず群論的考察により、 G_S の中心が H_S に入ることを示す (k が総実だと、ここの議論がうまく行かないようだ)。
 一方 strict cohomological dimension $\text{scd}(H_S) = 2$ が知られている。これは岩澤理論における弱 Leopoldt 予想が、内分 \mathbb{Z}_p -拡大に対しては正しいことから従う (§ 4 参照)。そこで次の補題を H_S に適用すればよい。

補題 3 G は pro- p 群で、 $\text{scd}(G) = 2$, かつ、 G が \mathbb{Z}_p^\wedge の

非同型な全射が存在するとする。このとき G の中心は自明。

(ii) 後半の主張は、 G_S に関して知られている事実 (Euler-Poincaré 標数の計算, Leopoldt 予想との関係, [Wi] の結果等) を組合わせて得られる。次に前半の Leopoldt 予想に関する仮定は、実は $\text{scd}(G_S) = 2$ と同値であるので (これは仮定が一般で成り立つ)、 G_S に補題 3 を適用すればよい。□

注: 最近、中村氏により次が証明された。“ $\text{pro-}p$ 群 G に対し、Euler-Poincaré 標数 $\chi(G) = \sum_{i=0}^{\infty} (-1)^i \text{rk } H^i(G, \mathbb{Z}/p\mathbb{Z})$ が定義され、かつ、 $\chi(G) \neq 0$ ならば、 G の中心は自明である” ([Na] 参照)。今の場合 $\chi(G_S) = r_2$ が知られているので、定理 2(i) は、これからも従う。

ちなみに、代数体の絶対ガロア群の中心の自明性は知られており (F. K. Schmidt, 1934)、絶対ガロア群の自己同型群の研究 (池田, 岩澤, Newkirk, 内田) にも応用された。また、最大 $\text{pro-}p$ 拡大のガロア群についても、中心の自明性は証明されている (広中-小林 [Hi], 鳥羽 [To])。

これらの証明はいずれも付値論的手法を用いているが、これが G_S にはうまく適用出来なかつたので、上のようなアプローチを試みた。 G_S から \mathbb{Z}_p^\wedge の全射を考えると、このアイ

ディラは, Riemann 面の場合の M. Anderson [Aw] の証明を
習ったものである。

尚, この方法で, 広中-小林, 島科の定理の別証明が得られ
たことも付け加えておく。

§4 弱 Leopoldt 予想

ここで, Leopoldt 予想, 弱 Leopoldt 予想 (weak Leopoldt
conjecture) について記号の導入をし, 知られていることを
まとめおく。[Ng] 参照。

p を素数, k を代数体とする。 k, p に対する “Leopoldt
defect” $\delta = \delta_p(k)$ を [Wa], p. 265 の如く定義する。 δ
 $= 0$ が Leopoldt 予想である。この予想と同値な言い換えが
いくつ知られているが, 例えは先にも書いたように,

$$H^2(G_S, \mathbb{Q}_p/\mathbb{Z}_p) = 0 \quad \text{もそのひとつである。}$$

次に k_n/k を \mathbb{Z}_p -拡大 (必ずしも円分でないよい)、
 k_n をその p^n 次中間体とし, $\delta_n = \delta_p(k_n)$ とおく。

弱 Leopoldt 予想 $n \rightarrow \infty$ のとき, δ_n は有界である。

これについて知られていることをいくつか挙げておく。

- (1) $H^2(k_s/k_m, \mathbb{Q}_p/\mathbb{Z}_p) = 0$ が, この予想と同値。
 (2) k_m/k が円分 \mathbb{Z}_p -拡大のとき, 予想は正しい (例えば [Wa], Lemma 13.30 参照)。
 (3) k に対する Leopoldt 予想が正しい $\Rightarrow k$ 上の任意の \mathbb{Z}_p -拡大に対する弱 Leopoldt 予想が正しい。

§5 自由 pro- p 拡大

Wingberg [Wi] の定理の応用を述べる。

自然数 d に対し, 階数 d の自由 pro- p 群を F_d と書く。例えば $F_1 \cong \mathbb{Z}_p$ である。 \mathbb{Z}_p -拡大の一般化として, 代数体の F_d -拡大 (ガロア群 $\cong F_d$ となるガロア拡大) を考察したい。その第一歩として, 代数体 k を固定したとき, k 上に F_d -拡大が “どのように” 存在するか調べるために, 次の不変量を導入する。体 k , 素数 p に対し,

$$\begin{aligned} \rho &= \sup \{ d \mid k \text{ が } F_d\text{-拡大を持つ} \} \\ &= \sup \{ d \mid \text{Gal}(k^{(p)}/k) \longrightarrow F_d \text{ (全射) が存在} \} \end{aligned}$$

と定義する。 d は一般の濃度としてもよいが, 以下では有限となる。

例: k が有限体のとき, すべての p に対し $\rho = 1$ 。

例: k が \mathbb{Q}_2 の意味の局所体 ($[k:\mathbb{Q}_2] < \infty$) のとき,

$$\rho = \begin{cases} 1 & \dots \quad l \neq p \quad \text{のとき} \\ n+1 & \dots \quad l = p, \quad k \neq \mu_p \quad \text{のとき,} \\ \lfloor \frac{1}{2}n+1 \rfloor & \dots \quad l = p, \quad k \supset \mu_p \quad \text{のとき.} \end{cases}$$

但し, $l = p$ のとき, $n = [k : \mathbb{Q}_p]$ とおいた。また $\lfloor \cdot \rfloor$ はガウス記号。これは, §2 で引用した局所体の最大 pro- p 拡大のガロア群の構造と, 後で引用する J. Sonn の定理からわかる。

さて, 以下 k は有限次代数体とする。この ρ が G_S と関連するのは次の理由による。

補題4 有限次代数体の F_d -拡大は p の外不分岐である。

(これは $d = 1$ のときにはよく知られている。)

従って $\rho = \rho_p$ とするとき,

$$\rho = \sup \{ d \mid G_S \rightarrow F_d \text{ (全射) が存在} \}$$

となる。

$G_S \rightarrow F_d$ (全射) があれば, アーベル化することにより $G_S^{ab} \rightarrow \mathbb{Z}_p^d$ (全射) が得られるが, G_S^{ab} は有限生成 pro- p アーベル群でその \mathbb{Z}_p -階数は $r_2 + 1 + \delta$ である ([Wa], Thm 13.4) から, 次の ρ の評価が出来る:

$$(*) \quad 1 \leq \rho \leq r_2 + 1 + \delta.$$

例: §3 の Šafarevič の例 ($k = \mathbb{Q}(\mu_p)$, p が正則) では

$\rho = r_2 + 1$ となっている。

ここで次のふたつの問題を考える。

問題A: 出来るだけ条件を弱めて, $\rho \leq r_2 + 1$ を示せ。

問題B: $\rho < r_2 + 1$ となる場合はあるか?

まず問題Aについては, 次の成り立つ。

命題5 k 上のすべての \mathbb{Z}_p -拡大に対し弱 Leopoldt 予想が正しければ, $\rho \leq r_2 + 1$ が成り立つ。

これは §4 (3) により, 上の不等式 (*) の精密化となっていることがわかる。出来れば無条件に $\rho \leq r_2 + 1$ を示したいところである。

次に問題Bについては, Wingberg の定理の応用として次が得られた。ここでも簡単のため $p \geq 3$, $k \supset \mu_p$ とする。

定理6 k_S/p で分解しないような k の素点 v_0 が存在するとき,

$$\rho = r_2 + 1 - \frac{1}{2} \sum_{\substack{v|p \\ v \neq v_0}} [k_v : \mathbb{Q}_p]$$

が成り立つ。特に $\#S_p > 1$ ならば, $\rho < r_2 + 1$ となる。

例: $p=3$, $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-3}, \sqrt{5})$ のとき, $\rho = 2$, $r_2 + 1 = 3$ である。

上の定理は $p=2$ でも適当な修正項を加えれば成り立つのだが、それをいすると次の面白い例が得られる。

例: $p=2$, $k = \mathbb{Q}(\sqrt{-l})$ (l は素数で, $l \equiv 7 \pmod{8}$) のとき, $\rho = 1$, $r_2 + 1 = 2$ 。すなわち k 上には \mathbb{Z}_2 -拡大以外の自由 $\text{pro-}2$ 拡大は存在しないことがわかる。

このふたつの例においては, v_0 として p の素因子 (ふたつあるがいずれでもよい) をとったとき, k_{sp}/k で分解しないことがそれぞれ Kuz'min , Tsvetkov によって (こことは別の問題意識から) 確かめられている。

定理6の証明の概略

まず, $\mathcal{S} = \mathcal{S}_p$ に対し

$$\rho = \sup \{d \mid G_{\mathcal{S}} \rightarrow F_d \text{ (全射) が存在}\}$$

であったが、仮定 (v_0 の存在) から, $G_{\mathcal{S}_p}$ は自由積分解を持つ (Wingberg の定理) ので, この自由積を構成する各因子が自由 $\text{pro-}p$ 群 Γ の全射について調べればよい。今の場合は, 各 G_{ν} は Demuškin 群となるので, 次の補題を用いることにより, ρ が計算される。 \square

補題 (J. Sonn [So]) Demuskin 群 G から F_d の全射が存在する
ための必要十分条件は、 $d \leq \frac{1}{2} \text{rk}(G)$ である。

一般の k, p に対する f の決定は難しいであろう。

References

- [An] M. Anderson, Exactness properties of profinite completion functors, *Topology* 13 (1974), 229-239.
- [Hi] Y. Hironaka-Kobayashi, On the Galois groups of the maximal p -extensions of algebraic number fields, *Natur. Sci. Rep. Ochanomizu Univ.* 27 (1976), 99-105.
- [ko] H. Koch, *Galoissche Theorie der p -Erweiterungen*, Springer-Verlag, 1970.
- [Na] H. Nakamura, On the pro- p Gottlieb theorem, to appear.
- [Ng] T. Nguyen-Quang-Do, Formations de classes et modules d'Iwasawa, in: *Number Theory Noordwijkerhout 1983*, Springer LNM 1068, 167-185.
- [Š1] I. R. Šafarevič, Algebraic number fields (Russian), *Proc. Int. Congr. Math. Stockholm 1962*, 163-176, = *AMS Transl.* (2) 31 (1963), 25-39.
- [Š2] I. R. Šafarevič, Extensions with given points of ramification (Russian), *Publ. IHES* 18 (1964), 295-319, = *AMS Transl.* (2) 59 (1966), 128-149.
- [So] J. Sonn, Epimorphisms of Demushkin groups, *Israel J. Math.* 17 (1974), 176-190.
- [To] G. Toba, On the center of the Galois group of the maximal p -extension (Japanese), manuscript, 1979.
- [Wa] L. C. Washington, *Introduction to cyclotomic fields*, GTM 83, Springer-Verlag, 1982.
- [Wi] K. Wingberg, On Galois groups of p -closed algebraic number fields with restricted ramification II, *J. reine. Angew. Math.* 416 (1991), 187-194.